

インド・チリカ湖の漁業資源配分メカニズムの実態と 漁村への社会的影響

岩崎 慎平

キーワード： 持続的生計アプローチ (SLA)、漁業取引に関する漁民と集魚人とマハジャンとの関係性、
漁業資源をめぐる漁民と非漁民間の社会的紛争

1. 研究背景

貧困問題は近年開発戦略の主流であり、貧困の捉え方は単純化された経済指標に留まらず、社会的排除、脆弱性など複雑かつ地域固有な考えへと移行しつつある。この状況下、多様かつ包括的な枠組みで貧困問題に対応する有効的な手段の一つとして、持続的生計アプローチ (SLA) が注目されている。SLA は貧困層の生計資産・制度及び組織・脆弱性の相互作用に着目した概念である。マクロ・ミクロレベル双方の分析を駆使し、より多様かつ包括的な視点から貧困問題の解決を目指すこの手法は、効果的に貧困削減を実現する手段として期待されている。しかし、漁業に関係する SLA の事例は少なく、研究及び実務両面から漁業を事例とした SLA 分析の要請は大きい。

2. 研究方法

本論はインド・チリカ湖の零細漁民コミュニティを事例に、SLA 分析 (漁民の貧困から脱却する可能性の発現を阻害する要因または脱却に向けてコミュニティが持つ強みを抽出し、生計の維持・改善に向けた処方箋を考えること) を目的とした社会水産調査を実施した。なお、零細漁民の固有な特性を考慮して 4 つの生計資産へと再分類し、過去・現在の両面から漁業資源をめぐる漁民と他の利害関係者の動向を把握、そしてチリカ湖の漁業経済が漁村のコミュニティにどのような影響を及ぼしているか、生計資産との相互関係を通じて検討した。

3. 調査結果

政府統計が推計した漁家年間所得の数値 (1,366 ドル) と反して、調査で得た漁家年間所得の過大評価の推計値 (1,023 ドル) は大きく下回る結果となった。それが故に、各漁家は厳しい生活 (例えば、女性労働の必然性、子どもの漁業労働への参加と教育の剥奪など) を強いらざるを得ない状態に直面していたことが判明した。

漁家が厳しい生活を虐げられる理由として、集魚人からの経済的搾取及び漁業資源をめぐる漁民と非漁民との社会的紛争が挙げられる。前者は、漁民と集魚人、マハジャンの 3 者間において借金という制約から派生した深い癒着関係が見出された。マハジャンは高品質および大量の魚を確保仕向けるように、集魚人に仲買業を目的とした借金を無利子で提供し、そのかわりに経済的価値の高い魚種を相対的に安く必ず引き渡すようにインフォーマルな契約を結ぶ。また付随して集魚人も漁民に対して、同様な手口で契約関係を結び、結果として漁民は経済的搾取を受けていたことが判明した。後者は、漁業権をめぐるカースト間の紛争が、結果として他の漁場を違法に占領する事態を多く招き、漁民は自陣の漁場確保に向けた監視体制を昼夜湖上で実施せざるを得なくなった。この時、集魚人は借金以外にも漁民の漁場に直接出向き湖上で生活物資の販売及び漁業取引を実施することで、借金の有無を問わず全ての漁民は集魚人に漁業取引を依存してしまうという必要悪な存在であることが判明した。

4. 期待される生計戦略

SLA 分析を通じた結果、貧困脱却及び持続可能な漁業資源管理に向けて重要な要素として漁協の復興が第一に挙げられる。漁協を通じて自立的発展に向けた過去の取り組み、コミュニティ間同士の伝統的な相互監視体制の活用は有効な手立てとなる。なお、漁協再生に向けて取り組む SIFFS の活動はチリカ湖の漁協育成の手本となるだろう。同様に、関係者間の動きに配慮しつつ、リース価格及びリース再分配に関係する漁業リース政策の抜本的な着手及び違法漁業に対応したモニタリング体制の強化が漁民の生計をより持続的なものへと導くだろう。